

青年部による魚食普及活動 —土佐湾のめぐみまるかじりツアー—

中央地区漁業青年部連合協議会
土居 浩彦

1 地域の概要

私たちの住んでいる高知県は、総面積 7,104 km²に人口約 81 万人が住んでおり、四国の太平洋側に位置し、700 kmにも及ぶ海岸線を有し、沖を流れる黒潮から多くの恩恵を受けてきた海の国である。

2 漁業の概要

広大な海岸線のほぼ全域が黒潮の影響を強く受ける土佐湾に面している当県の漁業は、地形特性やそれを活かした漁業形態の違いにより、宿毛地区、清水地区、中央地区、室戸地区に大別できる。中央地区では機船船曳網によるシラス漁業やマダイやカンパチを対象とした魚類養殖業、カツオ・マグロ類やその他を対象とした一本釣り漁業が盛んである。

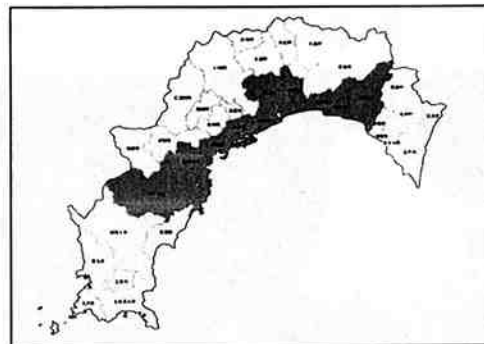


図1 高知県地域図
(色つき部分は中央地区の沿海市町村)

3 研究・グループの組織と運営

中央地区漁業青年部連合協議会は、高知県中央地区の四万十町（旧窪川町）から安芸市の間にある 13 漁協の青年部で構成され、高知県漁協青年部連合協議会の下部組織として平成 15 年に組織された。現在は、参加部員数およそ 40 名で、役員を中心に運営され、この組織をとおして 1 つの漁協青年部だけではできない活動が行われている。

4 研究・実践活動課題選定の動機

平成 15 年度に当協議会が発足した当初は、漁業種類の違い等で交流の少ない他漁協の青年部同士の交流を主な目的としていたが、部員の中から「これだけのメンバーがいるのなら、今までできなかったこともできるのではないか」、「自分たちの獲っている魚を PR しよう」との意見があり、これに参加部員の多くが賛同して、当協議会のメイン事業として毎年 1 回の魚食普及活動を実施している。

5 研究・実践活動の状況及び成果（効果）

(1) 土佐湾のめぐみまるかじりツアー

我々の実施している魚食普及活動は、平成 15 年の活動開始当初より毎年 10 月に開催している。これは、当協議会の中心的なメンバーの多くがシラス船曳網漁業に従事しており、10 月はシラスの漁が落ち着くために部員が動きやすくなること、また、解禁し

て間もない伊勢エビを用意しやすいためである。参加者の対象は、家庭で料理をする機会が多いけれど魚の食べ方や調理の仕方を特に知らないと言われている20代～30代の女性とした。そして、形式ばった活動にしたいくないとの思いからイベントツアー形式として、高知市等から開催地までバスで参加者を送迎し、まずはじめに料理教室形式で調理方法を覚えてもらい、でき上がった料理を参加者で美味しく味わってもらうことにした。また、希望者には自分たちの漁船へ乗船してもらい、我々漁師の仕事について少しではあるがこういうものだということを感じてもらった。

魚食普及活動では、美味しく食べてもらい、かつ料理方法を覚えてもらうことを目的にしているが、このような活動自体が全く不慣れであったためか、初めの2年間は、調理を青年部員が最初から最後までしてしまうという状況が見られた。そのため、平成17年度からは各部員が参加者にもっと指導しやすいように、募集人数と当日のメニュー数を少なくし、参加者1人1人にできるだけ多くの指導ができるような体制とした(写真1)。また、使用する魚の種類も参加者がそれぞれの自宅で魚料理ができるように、スーパー等で簡単に購入できるものを使用した(表1)。



写真1 参加者に調理の指導をする青年部員

表1 魚食普及活動の実施状況と指導した料理のメニュー

開催日時	開催場所	青年部員数 (ボランティア含む)	参加者数	指導した料理のメニュー
H17. 10. 16	香南市赤岡漁港	33名	32名	シイラとキビナゴのフライ 養殖マダイを使った鯛飯、刺身 お造り(ブリ、マダイ) カツオ、ヨコのタタキ
H18. 10. 15	春野町春野漁港	30名	31名	シイラとキビナゴのフライ 養殖マダイを使った鯛飯、刺身 養殖ブリを使った照り焼き、ブリ大根、刺身 しめ鯖、マグロ内臓のヌタ和え

(2) 参加者に対するアンケート調査結果

平成17年度のイベント終了後に参加者を対象に行ったアンケート調査(回答数16名、図2)では、「今までに魚を料理したことがある」と答えた人は全体の半分(50%)に過ぎず、その中でも最初(丸のままのもの)から全部できると答えた人は38%にとどまっていた。このことから、6割を超える人は切り身まで調理されていないと魚の調理ができないことが分かりました。一方で、「今回のツアーで料理の実演は参考になったか」との問いに9割を超す参加者が「はい」と答えており、「帰ってからも魚を料理してみようと思うか」との問いに7割近くが「はい」と答えており規模の小さな活動ながら魚食普及活動の成果につながったと考えられた。

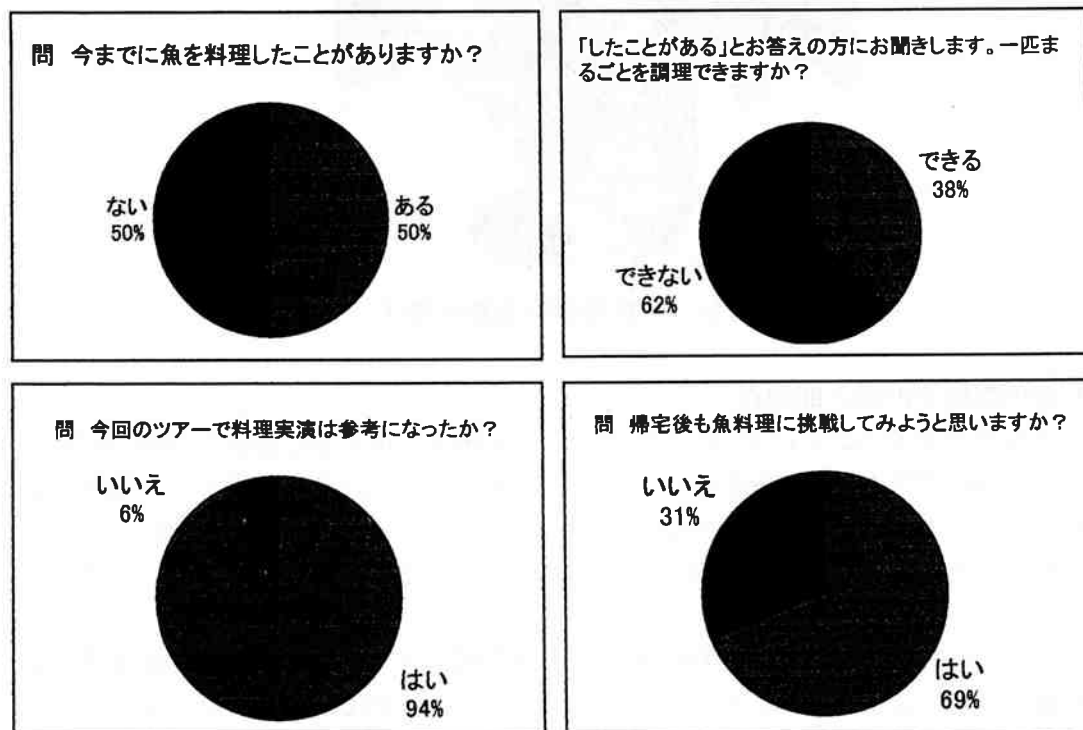


図2 イベント後に行ったアンケート調査の結果(平成17年度実施結果)

(3) 地元のイベントでの魚食普及活動

平成18年からは、高知県中央部の漁業士で組織する中央地区漁業士会と連携して、毎年4月に香南市で開催されている「どろめ祭り」というイベントで出店販売を行った。はじめての参加ではあったが、地元で獲れたアジやチダイ、ニギスやアオメエソを部員が事前に干物に加工したものを販売したところ、予想以上の売り上げがあり、地元水産物のピーアールができたと同時に、今後の魚食普及活動を続けていくための活動費用を調達でき、一石二鳥の結果となった。

6 波及効果

2年目以降、我々が取り組んでいる魚食普及活動の様子を地元の新聞社やケーブルテレビが毎年取材にくるようになり、我々の活動をニュースや新聞記事で取り上げてもらっている。その中でも、平成17年からは地元のケーブルテレビ(放送世帯数45,000)

が当日用意した地元の魚を使った料理番組をイベント中に収録し（写真2）、後日その様子が放送された（放送回数延べ16回）。放送地域は限られているが、少なからず我々の活動を広められていると実感している。

また、高齢者の多い漁村に住んでいて、普段は漁業関係者以外とあまり交流がない若手青年部員の中には独身者も多く見られるが、この活動により参加した女性との間に新たな交流が生まれたことも、この活動から得た大きな収穫の一つと考えている。



写真2 料理番組収録の様子

7 今後の課題や計画と問題点

今回の魚食普及イベントによって、我々が日々漁獲する魚が多く売れたり値段が高くなるというわけではないが、魚を食べてくれる消費者がいてはじめて成り立つ産業であるため、1人でも多くの人に土佐の魚の美味しさ、すばらしさを再確認してもらい、1人でも多く「土佐のさかな通」を増やしていくために、今後も続けていきたいと考えている。

また、どこの漁協青年部も部員数の減少で活動規模が縮小しており、若手漁業者が活動する場が少なくなっている。その中で、いかにして次の世代を育てていくのかということがこれからの課題だと考えている。